

## 湖畔

鏡のような水面を揺らすことなく  
砂利浜を緩やかに舐める湖水  
小舟は岸を離れてゆく  
これまでの時間のすべてを乗せて  
銀色の鈍い光を放つ指輪——  
それを外し、小舟へ投げ入れる

次第に拡がってゆく傷口の奥  
やるせない想い  
ますますわからなくなってくる  
どうして生き長らえているのか  
誰のものでもない  
私自身

自問自答している  
言葉は何のためにある  
声は何のためにある  
表情はなんのためにある  
孤独というものではない  
ただ、ひとりであるということ

転調した微風が  
背後から私の傍らを通り過ぎ  
小舟をゆっくり遠くへ押しやってくれる  
理解などできるはずもない寂寥感  
ただ苦しい祈りだけが息づいている  
それそのものが私自身となっている  
誰のものでもない

*(2013.9.22)*